国立国語研究所学術情報リポジトリ

宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): modern Japanese, dialect, standard Japanese, Kenji Miyazawa, Hirosuke Hamada 作成者: 小島, 聡子, KOJIMA, Satoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000502

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 5: 27–41 (2013)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online

宮沢賢治と浜田広介の語法に見る方言からの影響

小島　聡子

岩手大学／国立国語研究所 共同研究員［–2012.09］

要旨

近代は「言文一致体」・「標準語」を整備し普及させようとしていた過渡的な時代である。そのため，当時，それらの言語とは異なる方言を用いていた地方出身者は，標準語を用いる際にも母語である方言の影響を受けた言葉づかいをしている可能性があると考え，近代の東北地方出身の童話作家の語法について，彼らの言葉づかいの特徴と方言との関連について考察した。

資料としては，宮沢賢治の『注文の多い料理店』，浜田広介の『椋鳥の夢』を全文データ化してコーパスとして利用した。その上で，文法的な要素に着目し，格助詞・接続助詞等の一部について，用法や使用頻度・分布などを既存の近代語のコーパスと比較し，その特徴を明らかにすることを試みた。また，『方言文法全国地図』などの方言資料から，彼らの言葉づかいと方言との関連性を探った。その結果，格助詞「へ」の用法・頻度については，方言の助詞「さ」の存在が関連している可能性があることを指摘した。また，接続助詞の形式，限定を表す表現などにも方言からの影響がある可能性を指摘した*。

キーワード：近代語，方言，標準語，宮沢賢治，浜田広介

1. はじめに

近代に作り上げられた口語体の書き言葉である「言文一致体」あるいは「標準語」[1]が，その大部分を東京の言葉によっていることはすでに指摘されているところである。しかし，現在より言語の地域差が大きく，また全国共通のメディアも限られていた近代において，地方の人々は東京の言葉にはそれほどなじみがなかったと思われる。例えば，田中（1983）によれば，大正期に入っても，地方出身の学生は東京に進学すると言葉で苦労したという。これは主として話す際についての話ではあるが，そのような時代に，東京の言葉を基にした標準語を使って書くことも，地方出身者にとってはたやすいことではなかったと考えられる。

確かに，書き言葉の場合，文語文の影響も少なくなく，特に，論文などの固い文体のものは，文末が異なるほかは文語でも口語でもあまり違いがないような場合もあるので，話し言葉の場合ほどの苦労はなかったかもしれない。しかし，平易な文体で日常を描写するというような場合は，文語文との距離は大きく，その分，地方出身者にとっては，論文などを書く以上の困難を伴ったであろうとも推察される。

* 本稿は，国立国語研究所の独創・発展型共同研究プロジェクト「近代語コーパス設計のための文献言語研究」（2009 年 10 月～ 2012 年 9 月，プロジェクトリーダー：田中牧郎）の成果で，共同研究発表会（2011.12.26 開催）において発表したものをもとにしている。また JSPS 科研費 23520542 の助成を受けたものである。

[1] 本稿では，方言に対しての規範という意味で「標準語」という用語を用いているわけではない。ただ「標準語」を人為的に作ろうと企図していた近代という時期の言語のあり方を観察するという立場から，「標準語」という語を用いる。

さらに，標準語とはいうものの，当時から確固たる「標準」が示されていたとはいい難く，揺れもあった。そのような標準語を使って地方出身者が書いた場合，方言の影響を少なからず受けている可能性が考えられる。

つまり，近代の資料に見られる言葉の揺れのなかには，方言の影響が見られる可能性があるということでもある。この点は，近代語を考えるうえで，検討を要するところであろうと思われる。また，この時代の地方出身者の書いた作品の語法を細かく観察することで，標準語がどのように普及していたかを知る手がかりにもなりうるのではないかと考える。

そこで本稿では，すでにある程度標準語が浸透してきた大正期の，東北地方出身の二人の童話作家，宮沢賢治[2]と浜田広介を取り上げる。童話作家を選んだのは，童話は子供向けのものなので，平易な文体で書かれていると考えたからである。

ところで，方言の文法については，近年一段と注目を集めているところである。

本稿で取り上げる二人の出身地である東北地方の方言についても，過去などの時間的なことを表す表現や，可能・自発の表現などをはじめ様々な研究がなされ，方言の文法体系が明らかにされつつある。一方で，文法的要素の方言は，特にそれが形の違いではなく意味・用法の違いとして現れる場合，方言とは気づかれにくくなり，方言話者が標準語を用いる際にもそのまま用いられる場合も少なくない。例えば，岩手県では，改まった場面で使われる「～しておりました」・「～していました」は，「完了」を表すのではなく「現在の状態」を表す表現として用いられる。「キャンペーンをやっておりました」と言われたら，今，キャンペーン中ということである。このような使われ方がされることには，方言における時間表現形式の体系のありようが深くかかわっていると考えられるが，発話者には方言として発話している意識は全くない。そのため，思わぬ誤解を生じたり，通じなくて驚いたりするということもあるようである[3]。いずれにせよ，文法的要素は，標準語の中で方言の影響が表れやすいところということができる。

そこで，本稿では，特に文法的な要素を中心に二人の作家の用語を分析し，方言からの影響の仕方などを考察してみたい。

2. 宮沢賢治と浜田広介

まず，宮沢賢治と浜田広介を簡単に紹介しておく。

宮沢賢治は 1896（明治 29）年，岩手県川口町（現・花巻市）に生まれた。盛岡中学校から盛岡高等農林学校に進むが，中学時代から短歌を作りはじめ，高等農林在学中には友人らと同人誌『アザリア』を作るなど創作活動をしていた。1933（昭和 8）年に死去するまでの間，1924（大正 13）年に詩集『春と修羅』と童話集『注文の多い料理店』とを出版しているが，生前はほとんど知られることがなかったようである。現在よく知られている「銀河鉄道の夜」をはじめとする多くの作品は，原稿（清書されたものも含む）の形で残されていたものである。

[2] 宮沢賢治は方言を用いた作品で知られるが，本稿では方言ではないところに注目する。
[3] 例えば，岩手大学の学生の話では，県外からの電話に，目当ての人物が外出中であることを伝える際，「今，出かけてました」と言って，いるのかいないのか聞き返されてしまうという経験があるという。

一方，浜田広介は 1893（明治 26）年，山形県高畠町の生まれで，米沢中学校から早稲田大学に進んだ。大学在学中に小説が入選し，その後，何篇か小説を書いたが，1917（大正 6）年に童話が懸賞に入選したのをきっかけに童話を書くようになり，童話作家として活躍した。1973（昭和 48）年に亡くなるまでに,「椋鳥の夢」「泣いた赤鬼」などをはじめとする数多くの童話を書き，それらは「ひろすけ童話」として親しまれている。

ところで，言葉の面からこの二人の生い立ちを見るとき，まず，宮沢賢治は 1903（明治 36）年に小学校に入学していることが注目される。これは，翌 1904（明治 37）年から国定読本の使用が開始されたというタイミングである。標準語の普及には国定読本の使用がその一端を担っていることは知られており，宮沢賢治はいわば国定読本による標準語教育を受けた第一世代の一人ということになる。

また，標準語は東京の言葉と関係が深いことは先述の通りだが，その東京の言葉との接触という点で，宮沢賢治と浜田広介は大いに異なることも注目されるところである。

近代の作家は，東京で生まれ育った人，あるいは，青年期に東京に出て高等教育を東京で受けるなど，ある程度の長期間東京の言葉にさらされている人が多い。

浜田広介の方は，他の多くの作家同様，大学入学を期に上京し，卒業後も東京で執筆活動をつづけている。一方，宮沢賢治は，高等教育も東京に行くことなく岩手県内で受けている。妹トシの看病のためなどの機会に，何度も上京し，時には長期滞在もしているが，それでも滞在期間は長くても一年に満たず，当時のほかの作家に比べれば，格段に東京の言葉との接触が少なかったといえる。

つまり，宮沢賢治は，青年期以降もあまり東京語にさらされることなく，標準語は教科書中心に習得した程度で，基本的には方言社会の中で暮らしていたのに対し，浜田広介は，東京語の只中で暮らし，故郷の方言からは離れていた。もちろん，どんなに長く暮らしてもその土地の言葉が簡単に習得できるわけではないだろうが，接触の期間が長ければある程度はその影響を受けるはずである。従って，宮沢賢治と浜田広介とでは，標準語へのなじみ具合も，また方言の影響の仕方も異なる可能性が考えられる。

また，大雑把に「東北方言」とはいうが，浜田広介の出身地である山形県･置賜地方の方言と，宮沢賢治の出身地である岩手県花巻市周辺の方言[4]とは，異なる点も少なくない。標準語との異なり方もそれぞれで違いがあり，従って，彼らの標準語に見られる違いの中には，母方言の違いに起因するものがあることも考えられる。しかし，標準語との違いという点では共通するところも多いので，二人の方言からの影響の違いを比較することも可能であると考える。

3. 資料について―コーパスの利用

資料として用いたのは次の作品である。

[4] 方言について，山形県の方言は遠藤他（1997）を，岩手県の方言については森下（1982），齋藤他（2001）なども参考にした。

浜田広介（1921）『ひろすけ童話　椋鳥の夢』　約 70600 字：約 45400 語
宮沢賢治（1924）『イーハトヴ童話　注文の多い料理店』　約 51000 字：約 33000 語

どちらもそれぞれの作家の処女童話集で，ほとんど間をおかずに出されている。またそれぞれの出版時における年齢は同じである。規模は，浜田広介『椋鳥の夢』が宮沢賢治『注文の多い料理店』の約 1.4 倍である。

テキストは初版本の復刻を利用し，これらを底本として電子化したものを「全文検索システム『ひまわり』」[5] によって検索可能な形にすることで，簡易コーパスを作成した。さらにまた形態素解析辞書 UniDic[6] を利用してテキストデータを形態素解析し，そのデータの検索には一部 ChaKi.NET[7] を利用した。ただし，旧仮名遣いでは誤解析しやすいため，ChaKi.NET 等での解析に際し，宮沢賢治については青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）の新字新仮名遣いのテキストファイルを用いた。また，浜田広介については旧字旧仮名遣いのテキストをそのまま用いており，現状では誤解析が 5% 弱含まれていると思われる [8]。そのため，総語数は概数である。

また，両者の言葉の特異性を考えるには，当時の言葉として標準的なものと比較する必要がある。そのための材料として，本稿では，既存の『太陽コーパス』（国立国語研究所 2005），『近代女性雑誌コーパス』（国立国語研究所 2006）[9] を比較の対象として用いた。

近代はいわば文体の模索期であり，表現の揺れも大きい。それだけに，現在の口語では用いないような表現が見られた場合でも，それがその作家に特有の語法であるのかどうか，さらに方言の影響があるかどうかなどを直ちに判断することは困難である。あるいは，現在と異なるところはすべて古い言葉づかいだと判断されてしまいがちでもある。

しかし，簡易な形にせよコーパスにすることによって，個人の中での表現の揺れや言葉づかいの傾向を観察することが可能になる。また，これまでに作られた『国定読本用語総覧』（国立国語研究所 1997，以下，『国定読本』と略称）や『太陽コーパス』（以下，『太陽』と略称），『近代女性雑誌コーパス』（以下，『女性』と略称）などのコーパスを用いれば，ある程度当時の標準的な言葉づかいの目安を得ることが可能で，それと比較することで，個人の表現の特異性について検討することもできる。特に本稿で取り上げる宮沢賢治や浜田広介の作品が書かれた時代は，これらの既存のコーパスが対象としている範囲とほぼ重なっており，比較の対象とするのに最適である。

---

[5] 国立国語研究所の開発したソフトウェア。（http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/ よりダウンロード可能）
[6] 伝康晴・山田篤・小椋秀樹・小磯花絵・小木曽智信により作成された形態素解析用辞書 UniDic version 1.3.12。（http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?UniDic）
[7] 奈良先端科学技術大学院大学によって開発されたコーパスを管理するツール。（http://sourceforge.jp/projects/chaki/ よりダウンロード可能）
[8] 現在，人手による修正作業を行っているが全文は完了していない。誤解析 5% 弱というのは既修正分から割り出したものである。
[9] 2006 年に国立国語研究所から CD-ROM で公開されたが，現在はウェブ上で公開されている。（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/woman-mag/）

4. 格助詞の用法

本節ではまず格助詞について取り上げる。

4.1「が」と「を」

格助詞について，東北地方では「が」や「を」はあまり使われないことが知られている。しかし，「が」や「を」は，比較的わかりやすい格であるからか，標準語を用いた場合にもあまり違和感なく使われていて，頻度が極端に少なくなったりすることはあまりないようである。

しかし，宮沢賢治の作品には微妙に異なる部分が見受けられる。小島（2006）では，宮沢賢治がいわゆる対象語を表す場合に「が」ではなく「を」を用いることが見られることを指摘した。

(1)　わたくしは，さういふきれいなたべものやきものをすきです。（序）
(2)　あなたは黄金のどんぐり一升と，塩鮭のあたまと，どつちをおすきですか。（どんぐりと山猫）
(3)　あれを嫌ひなくらゐなら，どうせろくなやつぢやないぜ。（山男の四月）

のような例である。『注文の多い料理店』の中では「が」を用いた例も 1 例あるものの，「を」の例の方が多い。

対象語は，「が」か「を」か揺れる可能性があるところではある。しかし，例えば，他のコーパスで見ると，『国定読本』で「好き･嫌い」の対象はすべて「が」で表されており [10]，また『太陽』でも「好き」の対象には「が」を用いる例がほとんどで，「を」を用いた例は皆無ではないが大変少ない [11]。

以上のことから，近代において「好き･嫌い」の対象は「が」で提示される傾向が顕著であり，宮沢賢治はやや特異であるといえそうである [12]。

これについて，小島（2006）では，方言の影響が考えられることを指摘した。東北方言では「好き」の対象を表すのに助詞を用いないため，標準語にするには助詞を補うという感覚で，その際「好く」に用いる助詞からの連想も働き，「を」を選択したのではないかと考えたのである。

一方，今回，浜田広介でも調べたが，「好き」で対象が示されている 5 例はすべて「が」が用いられており，「を」を用いた例はない。置賜方言においても，対象語は無助詞で表現される点は花巻方言と異ならず，浜田広介も「を」を用いてもよさそうではあるが，宮沢賢治と浜田広介とで異なるのは，やはり浜田広介の方が標準語になじんでいて方言からは距離があったということではないかと考えられる。

---

[10]「どんぐりと山猫」は第 6 期国定読本に教材として採用されているが，当該箇所は「どちらがおすきですか」と改変されている。
[11]「好き」の対象を「を」で表示した例は 4 例しか確認できていない。一方，「が」で表示される例は「が」が直前に出てくる例に限っても 94 例が確認できる。
[12] 用例の頻度が少なすぎるため検定には適さないが，一応，『太陽コーパス』と比較した場合，宮沢賢治の「を」の頻度は 0.1% 水準で有意に高いといえる。

4.2「へ」と「に」

次に「へ」と「に」の分布について考察する。

東北地方に特徴的な助詞として「さ」があることはよく知られている。「さ」は，用法が地方ごとに少しずつ異なるが，広く東北地方で用いられる助詞である。小林（1995）では東北地方各地のサの用法を概観して，次のようにまとめている。

i ある対象に向けての生物や事物・観念の移動が行われる場合，その対象をサで表示することができる。また，実際の移動を伴わなくとも，論理的な前提として移動が想定可能であれば，その対象にサを使用することができる。（p. 238）

ii 移動を伴わなくとも，ある対象に向けての方向性が認められるならば，その対象をサで表示することができる。（p. 234）

また，地方によってこれらの用法が「さ」ではなく「に」で表される場合もあるという。

一方標準語では，このような場合，「へ」あるいは「に」が使われる。

つまり，方向や帰着点･目的地等を表す助詞として，東北地方の方言では，広く「さ」や「に」が用いられ「へ」はほとんど用いないのに対し，標準語では「へ」や「に」を用い，「さ」は用いない。従って，方言の影響が大きい場合，標準語の「へ」を，標準語にはない「さ」の代わりとして用いる可能性があるのではないかと考える。

4.2.1「へ」と「に」の使用頻度

さて，鷆岡（2007）は，近代以降の作家の「へ」と「に」の使用率を調査し，その違いが地域差に基づくものである可能性を指摘している。それによれば, 西の方の出身者では「に」が多く，出身地が東へ行くほど「へ」が多くなるという傾向があり，東北地方の作家である宮沢賢治は特に「へ」の使用率が高いという。

しかし, 東北地方出身の作家が誰でも「へ」の使用率が高いというわけではない。小島（2012）では，宮沢賢治と浜田広介の「へ」の使用について，本稿と同じ資料を対象に調査した。それによると，用例数及び「へ」を受ける動詞の異なり語数は下記の通りである。

表 1 「へ」の用例数と「へ」を受ける動詞の語数

	「へ」の数（総語数に対する割合）	動詞の異なり語数
宮沢賢治	99 例（0.300%）	48 語
浜田広介	58 例（0.127%）	28 語

ここで，「へ」の用例数を総語数と比較し，χ^2 の独立性検定を行うと，浜田広介に比べて宮沢賢治の方が「へ」の頻度が 0.1% 水準で有意に高いといえる。同じ東北地方の出身ではあるが，浜田広介では「へ」の用例数も少なく，「へ」を受ける動詞の種類も多くない。「へ」の頻度の高さについて，宮沢賢治はやや特異であるということができる。

また，動詞の種類を見ても，浜田広介の場合，明確に移動を伴う場合か方向を表す場合がほと

んどで，標準語の「へ」の用法として違和感はない。一方，宮沢賢治も基本的には移動の動詞と共起する例が多いのだが，それ以外にも「手帳へ書く」「ここへ畑を起こす」などの例が見られる。これは標準語の「へ」の用法としてはやや違和感があるが，東北方言の「さ」の用法の範疇には入るものである。従って，宮沢賢治については，「へ」を「さ」の代わりに用いたために頻度が極端に高くなった可能性が考えられる。

さらに，本稿では，「へ」のみの頻度だけでなく，同じ動詞の場合に「へ」と「に」のどちらを選択するかなどについても調べてみた。

まず，「行く」と共起する場合について，「～て行く」・可能動詞「行ける」・禁止になる「いかん」を除き，単独で移動の意味に用いられた場合について，助詞の頻度を示したのが表 2 である。

表 2 「行く」の場合の助詞の分布

	行く（総数）	へ	に［内，目的の例］
宮沢賢治	61	20	13 [4]
浜田広介	78	14	19 [1]

この表で見る限り，宮沢賢治の方が「へ」の頻度が高いようには見える。しかし，同様に検定すると「へ」の頻度について，ここでは有意差があるとはいい難い[13]。「行く」は移動を意味するもっとも一般的な動詞であり，「へ」を受ける動詞としても最も多く見られる語でもある。従って，「へ」の使用例の多くない浜田広介においても一定程度用いられているため，有意差が認められるほどまでは少なくならないものと考えられる。

次に「入（はい）る」について，同様に「へ」と「に」の分布を調査したところ，以下の表 3 の通りであった。

表 3 「入る」の場合の助詞の分布

	入る（総数）	へ	に
宮沢賢治	28	8	16
浜田広介	10	0	8

ここで，浜田広介では「へ」が現れないというのは宮沢賢治と大きく異なるところではあるが，用例数 0 は検定には適さず，これだけでは有意差があるとはいい難い。

そこで，『太陽』，『女性』で，「入る」「入れる」の可能性のある語について（検索文字列「入」・後文脈「[らりるれろつ] で始まる」とした），キーの直前に「に」あるいは「へ」が出る場合を検索すると，次の表 4 のような分布になる。なお，宮沢賢治と浜田広介についても同様の例の用例数を調べた（用例数が表 3 と異なるのは，検索条件が異なるためである）。

[13] p 値が，イェーツ補正なしの場合は $p = .048$，イェーツ補正ありでは $p = .071$ となり，微妙なところではある。

表 4 「へ - 入る / 入れる」・「に - 入る / 入れる」の分布

	へ - 入る / 入れる	に - 入る / 入れる
宮沢賢治	7	16
浜田広介	0	12
『女性』	57	478
『太陽』	330	3261

この場合，『太陽』を基準に「入る / 入れる」と共起する場合の「へ」と「に」の分布について χ^2 の適合度検定を行うと，『太陽』と浜田広介および『女性』との間には有意差が認められないが，宮沢賢治とは 0.1% 水準で有意に異なっており，「へ」が多いといえる。

以上のことをまとめると，宮沢賢治は「へ」の使用頻度が高いが，その頻度の高さは，「行く」のように標準語でも「へ」が使われやすい動詞においては目立たず，一方標準語ではあまり「へ」が使われない動詞においては宮沢賢治の「へ」の頻度の高さが際立っているということができる。

このような違いは，宮沢賢治の方がより方言の影響下にあることによるものと考えられる。

先にも述べたが，標準語で「へ」や「に」を用いるような場合に，東北方言では「さ」が用いられることが知られている。ただし，いつでも「さ」を用いるわけではなく，「に」も並行して用いられる。いくつかの方言資料の記述を総合すると，東北方言の「に」と「さ」の分布の傾向は次のようにまとめられそうである。

・「に」と「さ」はある程度用法が重なる。
・場所を表す場合でも必ず「さ」を用いるわけではない。
・変化の結果（「なる」など）の前は「に」が多い。
・時間を表す場合は「に」が多い。
・実際の移動を伴わなくても移動が想定できれば「さ」が可能。
・目的を表す場合は「に」も「さ」もある。　（例「見さ行く」「遊びさ行く」）

一方，標準語の「へ」と「に」の分布は，必ずしも上記の「さ」と「に」のあり方とは重ならない。「へ」と「に」とどちらでも使える場合があることは，「さ」と「に」と同じであり，また，「へ」も「さ」も移動の方向を表すことが多いという点は共通している。しかし，移動が感じられない例には「へ」は用いられにくく，特に移動の目的を表す場合には「へ」は用いられない。しかし，小林（1995）でまとめられているように，東北方言の「さ」は移動を表す場合でなくとも用いられるし，移動の目的を表すのにも用いられるという点で，標準語の「へ」よりも用法が広い。

しかしながら，標準語にも東北方言にも，似たような意味で用いる助詞二つのペアがあり，そのうちの一方が「に」で共通しているとなると，もう一方の助詞「へ」と「さ」とを対応させて用いることはありそうである。つまり，宮沢賢治は，標準語では「へ」をあまり用いないところでも，東北方言で「さ」というところには「へ」を用いる傾向があり，その結果，他より「へ」の使用率が高く，また用法も広くなった可能性があると考えられる。

4.2.2「方」に下接する「へ」「に」の分布

一方，4.2.1 節で見た通り，同じ東北地方出身ではあるが，浜田広介は宮沢賢治のように「へ」の使用頻度が顕著に高いということはない。では，方言の影響が全くないといえるかというと，細かく見ると標準語とやや異なる傾向も見られる。

浜田広介の場合，「へ」は「～の方」や「東西南北」の方角，「空」など漠然とした場所を表す語に付く場合が多く，特に「方」の場合「へ」と共起する場合が多いのである。一方，宮沢賢治の場合はそのような偏りはあまりなく，具体的な人や場所にも付く。

表 5 は，宮沢賢治・浜田広介・『女性』・『太陽』における「方」のあとの「へ」と「に」の分布である。ただし，どのコーパスにおいても「方」を「人」の意で「かた」と読んでいることが明らかな例は除外したが，特に『女性』と『太陽』では全て除外しきれてはおらず，概数である。

表 5 「方」に下接する助詞の分布

	方へ	方に
宮沢賢治	32	12
浜田広介	13	9
『女性』	183	454
『太陽』	858	3493

ここでも，宮沢賢治の「へ」の使用率の高さは歴然としているが，浜田広介でも「へ」の方が多くなっている。これは，『女性』『太陽』で「方に」の方が多いのとは傾向が異なる。『太陽』を基準に，χ^2 の適合度検定を行うと，宮沢賢治・浜田広介・『女性』ともに『太陽』での分布に比べて有意水準 1% で有意に「へ」が多いといえる。また，『女性』を基準に見ても，宮沢賢治は有意水準 1% で有意に「へ」が多く，また，浜田広介も有意水準 5% ではあるが有意に「へ」が多いといえる。

「へ」そのものの分布は浜田広介ではさほど多いわけではないことを考え合わせると，浜田広介の場合，「へ」の上接語の範囲をかなり限定的に捉えていることをうかがわせる。宮沢賢治で「へ」の用法が標準語より広いのに対し，浜田広介の方では，「へ」の用法が標準語で可能な範囲より狭く限定的に考えられているということになる。これについて，浜田広介の方がいわば過剰適応気味に，もともと母方言では使わない「へ」の意味を狭く捉えた結果と考えると，浜田広介にも宮沢賢治ほど顕著ではないが一定程度方言の影響が現れているといえる。

5. 接続助詞・接続詞

次に，接続詞・接続助詞について考察する。4 節で見た格助詞では，宮沢賢治に色濃く方言の影響を見ることができたが，こちらでは，浜田広介にも特異な傾向が見られる。

5.1「ので」と「から」

まず，原因・理由を表す「ので」「から」の分布を下記の表 6 に示す。なお，宮沢賢治と浜田

広介は実数だが，『女性』『太陽』では，接続助詞的に使われている可能性が高いものとして，それぞれ読点が付いた「ので，」「から，」の形で検索した概数である。

表 6 「ので」と「から」の用例数

	ので	から	ので／から
宮沢賢治	27	44	61.4%
浜田広介	11	85	12.9%
『女性』	759	1312	57.9%
『太陽』	4558	7098	64.2%

「ので」と「から」が同じような文脈でどちらかが選択されると仮定して考えると，宮沢賢治では「ので」対「から」は 2 対 3 程度の比率で分布しており，他のコーパスでの分布の傾向と大きく違わないのに対し，浜田広介の場合は「から」の率が高い。『太陽』を基準に，「ので」「から」の全体に対するそれぞれの頻度分布を確認すると，浜田広介の「から」の頻度は，有意水準 0.1% で有意に高いといえる。

これについて，方言との関連の可能性を探る。

例えば『方言文法全国地図』第 1 集（国立国語研究所 1989）には，「から」・「ので」についての調査がある。

第 33 図 「（雨が）降っているから」の「から」
　…山形・置賜，岩手・花巻ともに「kara・gara」
第 36・37 図 「子どもなので（わからなかった）」の「な / ので」
　…山形・置賜「datta・namoNda/gara・de」，岩手「da・^{N}da・na/gara・node」

これによれば，宮沢賢治の地元・岩手県では「ので」という形も見られるが，浜田広介の地元・山形県置賜地方では，「だったがら」あるいは，「なもんだで」という形が用いられていて，「ので」という形は見られないということである。

従って，浜田広介にとっては原因・理由を表すような場合の言い方として「ので」の形はなじみが薄かった可能性がある。そこで，原因・理由を表す場合，「ので」よりも使い慣れた「から」を用いる傾向が強かったのではないかと考えられる。一方，宮沢賢治の場合，花巻周辺の方言でも「ので」・「から」をともに用いていて，その点に限れば方言として特徴的ではなく，標準語と同様の傾向を示していると考えられる。

5.2「けれども」と「けれど」

次に，逆接に用いられる「けれども」と「けれど」の分布を表 7 に示す。

表 7 「けれども」と「けれど」の用例数

	けれども	けれど
宮沢賢治	18	1
浜田広介	7	168
『女性』	346	357
『太陽』	2562	1179

この場合,「も」が付くかどうかだけの違いなのだが, 分布に顕著な差がある。宮沢賢治は「も」が付く形がほとんどなのに対し，浜田広介の方はほとんどが「も」が付かない形で，両者の間に大きな差が見られる。一方，他のコーパスで見ると，どちらかに圧倒的に偏るということはなく，この偏りはそれぞれに特異であるといえる。『太陽』を基準に検定しても, 宮沢賢治の「けれども」の頻度は 1% 水準で，浜田広介の「けれど」の頻度は 0.1% 水準で有意に高いといえる。

こちらも方言との関係を考える。

逆接を表す場合については，『方言文法全国地図』第 1 集に以下の調査がある。

第 38 図「寒いけれども（がまんしよう）」の「けれども」
…山形・置賜「geNdo・geNdemo・geNdomo・geNdoN」，岩手「^{N}domo・domo」
第 39 図「だけど（行かなければならない）」の「けど」
…山形・置賜「geNdo・geNdemo」，岩手「domo」

これによると，両図ともに，山形県・岩手県ともに末尾に「も」の付いた形が広く分布している。特に，岩手県では「も」のない形はほとんど現れない。従って，宮沢賢治が「けれども」ばかりで「けれど」を用いないのは，方言で「も」の付く形しか用いられないことが影響していると考えてよいものと思われる。

しかし，山形県では，置賜地方の調査地点に浜田広介の出身地・高畠町はないものの，高畠町に隣接する南陽市が調査地点になっており，そこでは両図とも「げんど」という「も」のない形が見られる。特に，置賜地方だけに限って見ると,「だけど」の場合は他の地点でも「も」のない形が現れる。しかし一方で，遠藤他（1997）によれば，山形県全域で「けんども」が優勢であり，特に置賜地方は「けんども」の形を用いるとある。

このことから，浜田広介が「も」の付かない形の方を用いることについては，方言との関係で二通りの可能性が考えられる。

まず, 浜田広介自身が母語方言で「も」の付いた形を用いていた場合,「けれども」という「も」の付いた形は「方言である」という意識が強く，書く際には過剰適応的に「も」のない形を用いたという可能性がある。あるいは，『方言文法全国地図』の分布を見ると，浜田広介自身が母語として「も」のない形を使っていた可能性もあり，その場合，そのまま方言の影響で「も」のない「けれど」の方を用いたと考えることができる。

いずれにせよ，浜田広介にも宮沢賢治にも方言の影響が見られるといえそうである。

5.3「～ないに」について

次に，用法の分布ではなく，方言で解釈する必要があると思われる例を指摘する。

宮沢賢治の作品の中に，次のような「～ないに」という例が見られる。

(4)　もうそのころは，ぼんやり暗くなつて，まだ三時にもならないに，日が暮れるやうに思はれたのです。(「水仙月の四日」)

「ないに」という形そのものは，宮沢賢治でも上の 1 例のみ，浜田広介には「～でないにしろ」という例が 1 例あるだけで，頻度の違いなどを見ることはできない。しかし，『太陽』や『女性』でも，「～ないにちがいない」等の形はある程度見られるが，接続形式として用いられていると思われるものはあまりない。『太陽』で，接続形式として用いられていると思われる「～ないに」の例は 4 例である。しかし，下記の例のように，いずれも，「～ないのに」という逆接の意味である。

(5)　蓋し欧洲の夏は九時十時迄も日は暮れないに，道路工夫の如きは五時以後の勞働に對しては夜間勤務として大割増を要求し（1925 年 11 号「死線にさまよふ日本―経済的危機の真相と救済策―」矢野恒太）

先の宮沢賢治の例も，『太陽』の例と同様に「三時にもならないのに」という解釈も可能ではある。

しかし，宮沢賢治の出身地の花巻の方言集，花巻市教育委員会（2005）には下記のような語が収録されている。

(6)　「～ネァニ」＝「～しないうちに」
　　（文例）客「（来）ネァニ」片付げろ　＝　客が「来ないうちに」片付けろ

このことを考えると，先の例は「ならないのに」ではなく，方言の用法の影響のもと「ならないうちに」という意味で用いている可能性を考えなければならない。これは頻度などの形で現れるものとは異なるが，方言の影響を考える際には，このような用法や形式の微妙な違いにも着目する必要があると考える。

6. 限定を表す形式について

最後に，限定を表す形式について触れておきたい。

量や範囲を限定する形式は，『方言文法全国地図』第 1 集の第 47 図～第 53 図などからも明らかなように，方言独自の形や用法の分布のバリエーションが豊かなところである。また一方で，これらは近代と現代の時代差も少なからず見られるところでもある。本稿で取り上げた二人の用語のなかにも，限定を表す形式でやや特異かと見られる例はあるのだが，それらが方言の影響なのか，近代語としての特徴を示すものなのか，にわかに判別しがたい。

例えば，「くらい」という語について，少なくとも，宮沢賢治の場合，次のように「の」に下接する例が見られる点で，他と異なることを小島（2008）で指摘した。

(7)　栃の団子をとちの実のくらゐ残しました。（鹿踊りのはじまり）
(8)　六疋めの鹿は，やつと豆粒のくらゐをたべただけです。（鹿踊りのはじまり）

また，量を限定する意味で「くらい」が用いられている例は用法として少し変わっている。

(9)　わたしたちは，氷砂糖をほしいくらゐもたないでも（序）

この例は，「ほしいぶんだけ」あるいは「すきなだけ」という意味だと思われるが，かなり違和感を覚える表現である[14]。例えば，『太陽』では「ほしいくらい」という例はあるが，「暑くて，扇子が欲しい位だ」という例で，「位」は暑さの程度を表していて「欲しい」量を限定しているわけではない。

ただ，これらの用法については，方言との関連を直接見出すことは難しい。しかし，方言では限定を表すような表現の体系全体が標準語と異なるため，それがこのような特異な例となって現れた可能性も考えられる。

一方，浜田広介には次のような「～ぐるみ」という例がある。

(10)　クツクウの青い體は葉つぱぐるみ搖れました（青い蛙）

これは，「上接の名詞とともに全体で」の意で用いられる語で，「～ごと」と同様の意味を表す。

現代でも「ぐるみ」は，慣用句的な「身ぐるみ剥いで」というような表現のほか，「地域ぐるみの取り組み」や「組織ぐるみの犯行」，「家族ぐるみの付き合い」などのように用いられるが，組織のようなものに付くことが多く，「葉っぱぐるみ」のような例にはやや違和感を覚える。

ただし，近代においては「ぐるみ」の用法は現代より広かったようで，『太陽』でも下記のような例が見出される。

(11)　二分金を御札ぐるみに帶の間へ入ぬ（1895 年 01 号「従軍人夫」饗庭篁村）
(12)　盆ぐるみ推進めた番茶の土瓶を（1909 年 14 号「実印と預金帳」柴田流星）
(13)　地所ぐるみ借り入れたり（1917 年 13 号「暴風雨の夜」上司小剣）
(14)　馬一頭と馬丁と三人ぐるみ一緒になつて，厄介になつてゐたのだから（1925 年 07 号「明治初年外交物語（その九）青年外交家の台頭」豹子頭）
(15)　大雅寺を寺ぐるみ賣るから買つてはどうかと（1925 年 12 号「蕪村寺」橋本関雪）

なお，上記の例の使用者の出身地は，饗庭・柴田が東京，上司・橋本が上方であり，特定の地域に限定して用いられる表現というわけではない。

このように「ぐるみ」を用いることは，近代ではさほど珍しい用語であったわけではないことがわかる。また，『太陽』では同様の意で「ごと」を用いた例も 9 例ほど見出され，「ぐるみ」「ごと」のどちらの形も用いられていたということになる。

[14] 宮沢賢治については，本稿で取り上げていない作品で他に「好きなだけ」という意味で使われた「好きな位」というのも何例か認められる。

従って，この「ぐるみ」については，浜田広介の用法が標準語として特異とまでいうことはできない。ただし，方言との関係については，『方言文法全国地図』第 1 集第 53 図の「みかんを皮ごと食べた」の「ごと」についての調査で，山形県一帯で「garami・ŋarami」という形が見られることから，方言が影響している可能性は考えられる。つまり「ごと」ではなく「ぐるみ」を選んだのは，方言で「ごと」を用いておらず，「ぐるみ」に似た形が用いられていたことが影響していると考えるのである。

7. おわりに

本稿では，宮沢賢治と浜田広介を資料として，近代に標準語が浸透していく過程で，方言を母語とする人が標準語で書いた場合に，表面的には方言は表れないが，細かい語法などの中に方言からの影響を見出せないか，その可能性を検討した。扱えたのは，わずかな語例に過ぎず，また，コーパスの規模も大きくないため，決定的なことを言うことはできないが，特に「へ」の分布についてはある程度方言からの影響を想定できるといってよいのではないかと考える。

ただ，本稿では限定を表す表現についてはその一端に触れるにとどまっており，捉えきれていない。また，方言との関連について検討に用いたのは一部の資料のみで，確固たる結論を得るに十分なものとはいえない。今後の課題としたい。

参照文献

遠藤仁　他（1997）『山形県のことば』日本のことばシリーズ 6（編者代表・平山輝男），東京：明治書院.
花巻市教育委員会（2005）『花巻ことば集　せぎざくら』岩手：花巻市教育委員会.
小林隆（1995）「東北方言における格助詞「サ」の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44: 244–217.
小島聡子（2006）「『注文の多い料理店』の言葉について」『アルテス リベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）』78: 89–103.
小島聡子（2008）「宮沢賢治の童話の語法について―副助詞「くらい」の用法を中心に―」松林城弘（編）『言語と文化・文学の諸相』（岡田仁教授・笹尾道子教授退任記念論文集）121–132.
小島聡子（2012）「宮沢賢治の童話における「標準語」の語法―方言からの影響について―」近代語学会（編）『近代語研究第十六集』329–347. 東京：武蔵野書院.
国立国語研究所（1989）『方言文法全国地図』第 1 集. 東京：大蔵省印刷局.
国立国語研究所（1997）『国定読本用語総覧 CD-ROM 版』東京：三省堂.
国立国語研究所（2005）『太陽コーパス：雑誌『太陽』日本語データベース』東京：博文館新社.
国立国語研究所（2006）『近代女性雑誌コーパス』（注 9 参照）.
森下喜一（1982）『岩手の方言』東京：教育出版センター.
齋藤孝滋　他（2001）『岩手県のことば』日本のことばシリーズ 3（編者代表・平山輝男），東京：明治書院.
田中章夫（1983）『東京語―その成立と展開―』東京：明治書院.
鷆岡昭夫（2007）「関西以東の「へ」と「に」の分布について―近代の小説を資料として―」『計量国語学』25(8): 341–351.

Influence of Dialects on Colloquial Standard Japanese in the Works of Kenji Miyazawa and Hirosuke Hamada

KOJIMA Satoko

Iwate University / Project Collaborator, NINJAL [–2012.09]

Abstract

The early modern era (usually taken to be 1868–1945 in Japan) was a transition period during which colloquial standard Japanese developed through a process of unification of the spoken and written styles. The basis of this standard Japanese was Tokyo dialect. In this respect, it is known that those who were not from the capital found it difficult to adapt their local dialects to the standard language. One can therefore assume that some dialect interference may be observed in the works of writers of the time who came from provincial areas.

The study aims to illustrate such dialect interference in the usage of standard Japanese among people from the Tohoku region. For this purpose I analyze data from my original corpus of the works of Kenji Miyazawa (Iwate Pref.) and Hirosuke Hamada (Yamagata Pref.), both known as writers of children's stories, as well as from other corpora of modern Japanese for comparison. Particular attention is paid to the question of how their usage of the standard particle *e* is related to that of the dialect particle *sa*.

Key words: modern Japanese, dialect, standard Japanese, Kenji Miyazawa, Hirosuke Hamada